

個人レポート

綿矢りさ『蹴りたい背中』——蹴ることと認識する存在意義

井 上 晶 子

はじめに

二〇〇一年、『インストール』にて第三十八回文藝賞を受賞しデビューを果たした、綿矢りさ。二〇〇四年には『蹴りたい背中』で第百三十回芥川賞を受賞し、これまでの史上最年少を大きく塗り替えたことで話題となった。

高校一年のハツは、集団を作り安堵する学生生活に嫌気が差し、無理に友達を作ろうとはしなかったために、クラスでは余り者のような存在に陥ってしまう。中学からの友人絹代は少しずつ自分の元を離れていき、ハツは言い知れぬ虚しさを感じていた。集団の中に無理に染まって過したくはない、しかし一人きりでこなすには余りにも孤独でいたたまれない高校生活の数々——そんな中ハツは、クラスで集団に馴染むことを放棄するもう一人の生徒、にな川という存在に気付く。にな川はオリちゃんというモデルの熱狂的なファンであり、それ以外の実生活には無頓着な男子であった。ハツは、彼のこのオリちゃん以外の何者をも見ようとしてない「もの哀しく丸まった、無防備な背中」を蹴りたいという欲望に駆られる。そして彼らは、オリちゃんを介したかのような奇妙な放課後の関係を築いていくのであった。

ハツの目に映る教室という場は一体どのようなものだろうか。そし

て、彼女が他者との関わりの中に行き着いた答えとはいかなるものだろうか。本論は、ハツが孤独というものを認識することで自身の孤立化と向き合う強さを得たと考察し、その過程を追うことで、蹴りたいという欲望の正体を探っていくものとする。

一 ハツの凝視する世界

「さびしさは鳴る」と、ハツの孤独な心の声を冒頭に置き、物語は始まる。集団の中に安堵しながらも無理に笑うことに疲れ切っていた中学時代のハツ。高校では無理に集団化しようとせず、個を保ち生活しようとするが、そうした生徒に優しくはないのが学校という場である。「適当に座って五人で一班を作れ」などと難題を突き付けられる理科の実験や、「撮って撮って」とカメラマンに気軽に言い寄ることのできた強気そうで派手な子たち」のためにあるかのような遠足。顧問を上手く飼いつく慣らす部員たちと部員たちに物分りの良い教師と思われるべくあくせと演じる顧問とで成り立つ陸上部。至るところでハツの目は、そうした学校の在りようを凝視し、問いを投げ掛けている。

選評や書評において、石原慎太郎は「それにしてもこの現代における青春とは、なんと閉鎖的なものなのだろう」と、早坂茂三は「高校生の閉鎖的で他愛ない身内話である。これが文学とは思えない」と、それぞれ

れ評している。が、果たして『蹴りたい背中』に描かれる世界は、そう容易く評せるほどに、閉塞的で内向的なものだろうか。ハツの目を通して学校という場は、読者にどこか山田詠美『風葬の教室』を想起させ、虐めこそ存在しないもののマイノリティを排除する生徒たちの集団性を問う。ここに、現代の閉塞的で凡庸な高校生活を描いたに過ぎないなどと言いつれぬ、文学性を見出すことが出来はしないだろうか。

しかし、語り手（ハツ）はハツを甘やかすはしない。読者は、生徒たちの集団に鋭い眼差しを向けるハツと出会ったかと思いきや、風に飛ばされた紙屑を拾う「気怠さのかけらもなく」「何をやってもうまくいかない」彼女を目の当たりにする。後者のハツからは、「いかにも自分から孤独を選んだ、というふうに見えるように」虚勢を張る幼さが窺え、それは読者にもひしひしと伝わる形で描かれる。解説で斎藤美奈子は、ハツについて、「一人だから、誰もかまってくれないから、小さな音やアップの映像やかすかな匂いに、おのずと注意が向いてしまう」のだと指摘し、「シカト」や「イジメ」というわかりやすい言葉で説明したくない³」がために、「重く悲惨で逃げ場のない状況を「強がり」によってわざとはぐらかしている」のだと述べる。しかし、ハツの虚勢は、斎藤美奈子のいう「強がり」とはまるで異なる。グループへの参加を断るハツに対し、絹代の言う「ひがむのやめて」と、同質の見当違いさが、そこにはある。ハツは個が失われる集団化を避けたいがために、「同じ溶液に浸かってぐったり安心」することを自ら拒否しているのだ。そのため、ハツが集団化を拒まなかった場合も同様に、彼女が集団から避けられたかと言え、必ずしもそうとは言えない。また、ハツはこの現状を客観的に良く理解している。ハツは加不足なくその重さのままに状況を把握しており、そのため彼女の虚勢は、自らに向いた強がりなどでは

なく、他者の目に映る自己への虚勢なのである。

集団化を厭い、これほどまでに教室という小社会を鋭く見詰めるハツであるが、しかし他者の視線に対する少しの神経質さを見せ、そこに彼女の未熟さが窺える。ハツは、学校という絶対的なマジョリティの優勢に対する疑惑を投げ掛けながらも、「同級生じゃなく、一段低い者」と自らを認識してしまっている自身を、決して庇うことなく徹底的に孤独の内に立たせるのだ。そしてハツは、背中を蹴りたいという欲望を持つことで、そうした孤独に向かう強かさを手に入れる。

二 オリちゃん存在

無理に集団化しようと必死になっていた中学時代から一変して集団化を嫌うようになったハツ。では、彼女を変えた契機とは何であろうか。オリちゃんとの、無印良品での記憶―にな川との接触で思い出される一見些細な出来事であるかのように思われるあの記憶に、着目したい。

まだバレーボールという集団競技に親しんでいた中学時代のハツは、毎日の朝食を無印良品のコンフレークの試食で済ませていた。「今よりも周りに無頓着で、それゆえ強かった頃」と、ハツは当時のことを顧みるが、彼女には学校という場が全てであり学外の社会における羞恥を忘れがちな中高生の性質が窺える。学校で集団化し安堵することで自己の真の力や個性を見失い、学校の一步外に出ると彼らは時に自らの非力さを痛感する。オリちゃんとの出会いは、ハツにとってまさにそうであった。オリちゃんとカメラマンの男は大人のおふざけでコンフレークを食べさせるのだが、ハツが今日まで口にしていたコンフレークはあくまで真剣な朝食であって、おふざけではなかったのである。彼らにとって試食を掴むことは、恥ずかしいという認識のもとに行うおふざけで

あり、そこに羞恥心を感じてこなかったハツにとつてのそれは、今まさに「恥ずかしい」の弾がぶちこまれ」る瞬間となる。と同時に、ハツは大人のおふざけ如きにたじろぐ個としての自らと出会う。それは「泥臭く幼い私」であり、この出会いにより彼女は、無頓着であつた周囲に目を向けるようになったのである。また、おふざけに付き合おうと必死に振る舞う自身を、集団化しようと必死に笑いを作る日々のそれに投影したのかも知れない。この気付きは、「どんな思い出よりも鮮明に、中学時代の私を思い起させる」ものとして、強烈な印象をハツに与えた。オリちゃんとの出会いは、ハツに個を気付かせ、ゆえに彼女を孤立させた。そして、ハツとな川とを引き合わせるのもまた、オリちゃんである。

三にな川の背

理科の実験中のおとしたきっかけで親密になつたハツとな川。ハツは、にな川との接近を通して、どう変容を遂げたのだろうか。また、にな川の背中を蹴りたいという思いの正体とは、何であろうか。

にな川は、古い日本家屋のそれも家族とは孤立した離れに部屋を置き生活をしていた。まるで彼の学校での在りようを表象するかのよう。そしてその部屋のファンシーケースの中にオリちゃんに纏わる品々を収めていた。ハツは、そうした収集品の中に、彼の昔作つたアナログのアイコラを見つけてしまう。そして、その稚拙な作品の放つ何とも言えない卑猥さを、それを作つたにな川を、蔑み興奮する。そのとき湧き起つた欲望が、背中を蹴りたいというものだった。

長谷川啓はこの欲望について、「気になる男の子を、「愛おしいよりも、いじめたいよりも」と乱暴」に背中を蹴り飛ばしたい女子高生の気持

を描き、これまでの男女の意識を逆転」したと指摘し、「いよいよ男女の関係が転倒して痛快だ」と述べている。従来は逆方向に向かうものと捉えられてきた、女性から男性に向けられたある種嗜虐的なこの欲望を、新しい男女関係の在り方として清々しく読み、L文学の一つであると論じているのだ。

見舞いに行ったハツがにな川の唇を舐める描写などから、無意識裡にしろ、ハツがにな川に好意を抱き、性的欲望を抱いていることは明らかである。ライブ後の出待ちの際オリちゃんの出で来るであろう裏口の扉を見つめるにな川、を見つめるハツは、「私はオリちゃんを見つめていな川が好きだ」と認識する。そして、ひたすら否定してきた、絹代の指摘するにな川への恋愛感情に対し、「私の表情は私の知らないうちに、私の知らない気持ちを映し出しているのかもしれない」と、漸く受け入れたかのような反応を示すのだ。しかしハツのにな川に対する恋愛感情は、多くの一般的な女子高生とは異なっている。背を蹴りたいという欲望は、ハツの疑うマジORITYとは異なつた個としての性的欲望を保ちたいという思いの表れであろうか。オリちゃんに熱心な、これまた多くの男子校性とは異なるにな川への好意も、同様に捉え得るだろう。また、「この箱が愛しい」と、絹代にファンシーケースの中身を知られまいと必死になる様子から、ハツだけが知るにな川を占有しておきたいという願望が読み取れる。このように、ハツの行動は、にな川への性的欲望に他ならないと言えるだろう。しかし物語は、恋愛色を強く描こうとはしない。彼女はあくまで孤独の認識へと向うのだ。にな川を知ることとは、ハツにとつて孤独に立つ契機となつたのである。オリちゃんにだけ関心を寄せ「周りに無頓着で、それゆえ強」にな川と出会い、「あの日、オリちゃんの目に」「こんなふうに映つていたのかもしれない」

自らを重ね、ハツは、蔑みの眼差しを向ける。しかし、その背は蔑みのみならず羨望の対象ともなり得るはずだ。クラスの視線に神経を衰弱させることなくただ孤立している、その無関心さ。にな川の「もの哀しく丸まった、無防備な背中」には、そうした拙さと強さが詰まっていよう。その、孤独であることの強さに、ハツは惹かれたにちがいない。

四 陸上という一人競技

ハツを孤独に立たせるものの一つに、陸上がある。中学時代はバレーボール部に所属し団体競技に親しんでいたハツは、高校に入り「一人で戦える陸上を知」る。しかし、ハツはそこでも、部内における集団心理を嫌い孤立していた。そして、生徒ならまだしも老いた教師の「みみっちい計算」にいたたまれず、ある日ハツはついに先輩部員に本音をぶつけてしまう。が、その直後のハツは、思い掛けない行動を取る。百メートル走でハツに勝った部員に対し、「速いねえ。いいなあ、悔しいなあ」と声を掛け、「こうやってお互いをおだて合いつこすれば、仲良くはなれなくても、うまいことやっているんだらう」などと考えるのだ。これまででは集団化を避けてきたのであって、努力さえすれば慣れ合いに参加出来るのだ、と言わんばかりに。先輩部員の言葉が堪えたのだろうか、ここに、周囲を軽視しながらも自己の孤独に向かい切れぬ、ハツの弱さが見られよう。そして、顧問の教師はそれを見逃さない。これまでハツの目に情けない大人と映っていた彼が、ハツを認め、喝を飛ばす。そのときハツは、他者を軽視し求めるばかりであった自身の、孤独に臨むだけの強さの不在を、漸く顧みるのだった。

五 絹代からの離脱

そしてもう一人、ハツを孤独へと向かわせる人物——絹代の存在が大きくある。ハツの中学時代からの友人であるものの、絹代は集団化することで学校生活を楽しまたいと考えるごくありふれた高校生であり、そのため自身の利のために時としてハツを容赦なく切り捨てる。ハツはそんな友人を、毒づきながらもどこか嫌いになれず頼りにするが、人知れず彼女は傷付いていた。そしてオリちゃんのライブへ行つた夜、ハツは、絹代との決定的な隔たりに気付くのである。「あー、今日のこと、早くみんなに話したいなあ」という言葉を聞き、絹代の世界に自身の不在を認識したハツ。隣に寝ているにもかかわらずその距離は遠く、今後も縮むことはないであろうその距離に、ハツは孤独というものを認識する。集団に身を置き笑う者も、孤立し沈黙の長い休み時間を費やす者も、皆孤独の内にいる。自身の孤独を認識し、それと向き合う者こそが、「泥臭い幼さ」ではない、強さを有するのではないだろうか。

おわりに

このように、ハツは他者との関わりの中で自らが孤独の内にいることを認識し、それゆえに孤立を恐れない強さを得たのである。また、にな川への特殊な欲望を持つことが、個としてのアイデンティティの形成を導き、そうした強さに結び付いたのだろう。にな川の、オリちゃんへの執着が同様であったように。

背を蹴りたいという欲望は、幼い自身を想起させるがゆえの蔑みや、周囲に無頓着であるからこそその強さへの羨望、ハツの心理的な支えとなり得る効果など、あらゆる意を孕んでいた。背を蹴ることで、ハツはその足の裏に、自身の存在を確かめていたのかもしれない。

註

- (1) 「芥川賞選評」(『文藝春秋』二〇〇四・三)
 - (2) 「二百五十万人が読んだ芥川賞」二作品の衝撃」(『文藝春秋』二〇〇四・四)
 - (3) 斎藤美奈子「解説「蹴る」ことの意味」(綿矢りさ『蹴りたい背中』河出文庫、二〇〇七・四)
 - (4) 長谷川啓「女性作家の新動向」L文学と最近の芥川賞作家」(岩淵宏子・北田幸恵編『はじめて学ぶ日本女性文学史 近現代編』ミネルヴァ書房、二〇〇五・二)
- 〔付記〕本文引用は、綿矢りさ『蹴りたい背中』(河出書房新社、二〇〇三・八)に拠る。